
神様のおもちゃ箱

仁科治

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神様のおもちや箱

【Nコード】

N4602L

【作者名】

仁科治

【あらすじ】

旗が勇壮に風に舞っていた。入り口の門に戻ると、高い門柱に吊り下げられた黒い影を見た。

？ 13 『裏切り者の処刑』

？ 13 『裏切り者の処刑』

どこかへ走りだすと思ったからだ。けれども、ハンドルにうつぶせになっていた運転手の頭は、帽子ごと真っ二つに割れていて赤黒い血が固まっていた。首筋にも真っ黒な蛇が巻きついたように血が凝固していた。

ボクは遠くに見える明かりに向かって走った。

ボクは和紙に包まれた「招待状」を受け取ってから、眠りともつかない夢を観るようになった。

夢の中には、ボクと三人の男がいた。

ボクは語りだった。

「M氏の招待状」という台本を渡された。中は白紙だった。

ボクは三人の動作に合わせて叫んでいた。

台本は、眠りと目覚めの境に隠れていた黒覆面の男から手渡された。男は一言も発しなかった。

ある夜、男の足首に巻きついた鎖の跡がその行き先を教えてくれた。それは、黒煙を幾本も吹き出している工場群への道だった。

男を追って工場に入ったボクは、そこで赤や黒の旗が幾重にも揺れるのを見た。けれども、その下には人影はなかった。

広い工場群の中を走り回った。だれもいなかった。

旗が勇壮に風に舞っていた。入り口の門に戻ると、高い門柱に吊り下げられた黒い影を見た。

あの男だった。

男の足首は固く鎖で縛られ、首から男の顔の下に看板がぶら下がっていた。

『裏切り者の処刑』

大きな文字で書かれていた。

ボクは暗い街中を歩いていた。

どの建物も入口は破壊され、扉の金具は錆びついており、粗い壁面にはえぐり取られたような穴から黒い闇が染み出していた。

影の固まりがいくつもあった。うずくまった人々の群れだった。黒い塊が街路の両側を埋めていた。

ずいぶん歩いた。足首に重りを引きずっているような疲労が襲ってきた。

背後で女の低い声がボクを呼んだ。

ベールで顔を覆い隠していた。

「アナタガ遊園地ヲ過ギルコロカラ、後ニツイテ歩イテキマシタ」
「……………」

「アタシハ、アソコデ長イ間、アナタヲ待ッテイタヨウナ氣ガシマス」

「黒い大きな門は怖くありませんでしたか」

「イイエ、アナタガイルカラ」

「では、狐の森は」

「アソコデアタシ、トテモ悲シイ夢ヲ見マシタノ」

「ひよっとすると、ボクが見た夢と同じ……」

肩を強い力で押された。

目の前に伊藤が険しい顔をしていた。私は伊藤と一緒にだったのだ。山本の劇の回想から私は引き戻された。

「あのところ、皆によくいじめられたよな」

伊藤は、顔をねじるようなしぐさをした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4602/>

神様のおもちゃ箱

2011年1月28日15時13分発行